

令和5（2023）年度 第1学期終業式 式辞

駒場東邦生諸君、おはようございます。

昨日のニュースで、今年の上半期の訪日外国人の数が、4年ぶりに1000万人を超えたと伝えていました。コロナ禍前の水準に戻ったというわけです。現在も日本行きの団体旅行の販売を禁止している中国からの訪日者数が、4年前の4分の1程度にとどまっているということを考え合わせると、インバウンド回復の勢いはコロナ以前を超えるほどであると言ってもいいのかもしれませんが。近ごろのテレビニュース番組には、猛暑に驚く外国人観光客の姿が頻繁に映し出されていますし、実際に街を歩いていてもその姿を本当によく見かけるようになりました。これは、長く続いたコロナ禍のもと、我慢を強いられた私たちにとって、いよいよその苦境を脱却しようとしていることを象徴的に物語るものであるように感じます。一方で、新型コロナウイルスの感染が再拡大し、医療が逼迫しつつある地域もあるようですし、インフルエンザや子どもの間で流行しやすいとされる様々な感染症も急速な広がりを見せている状況で、これはやはり、マスクをはじめとした感染対策における緩和傾向が影響していると思わざるを得ないところです。やはり、まだ気を許してはいけないのではないかといった思いも、ふと頭をもたげたりします。しかし、社会の態勢は逆戻りすることはないでしょう。社会の成員たる私たちが、コロナ禍の間に学んできた様々なことを活かしながら、まさにウィズ・コロナの生活様式を実践していくことを求められているのであり、そこには、経済の流れを徒に滞らせてしまわないようにしようという暗黙の了解があるように思えます。始業式の折に私は、この回復の勢いに一抹の不安を感じるということを申し述べました。その不安を、その速度についていけずに取り残されてしまうのではないか、ついていこうとすれば大事なものを忘れてしまうのではないかという恐れにも似た感覚、と表現しました。経済回復への見えない意志は非常に強く、それへの抗いがたい感覚を、つい強迫的なものとして受け取ってしまいがちであるということが、その基調にあったかと思います。しかし、どうやら本格的に始まったコロナ禍からの回復のなかで、経済的な側面を批判的に捉えることができないのは当然のことなので、ここはしっかり覚悟を決めて、コロナ禍により被った痛みを忘れず、痛みを被った人々を疎外するような状況を作らないように、着実に歩みを進めていかねばならないのだと思います。

そういった意味で、駒場東邦生たる皆さん自身の今学期の実践は、どのように自己評価できるものだったでしょうか。ここでは経済的な側面は直接の関連をもたないかもしれませんが、それでも、様々な思いが絡み合う中で、ともすれば自分一人の意志ではどうにもならない圧力のようなものを感じることはなかったでしょうか。人々が集まる場所でそのダイナミズムが高まれば、個人が感じる圧力が強まるのはある意味当然のことと言えるかもしれません。そこで問われてくるのが、一人ひとりの振舞いです。いかに寛容の心をもって場に関わることができたかということです。今学期を振り返ってみるに、何ととっても、4年ぶりに観覧者を招いての体育祭を開催できたのは意義深いことでした。私は、皆さんそれぞれが、しっかり考えたうえで立派に振舞っていた様子が見られたと思っていますが、皆さん自身はどう感じていますか。日々の授業や部活動における振舞いはどうでしたか。これから夏休みに入り、中1・中2は林間学校があり、それぞれのクラブの夏合宿や文化祭に向けた準備があり、そして高3諸君は“天王山”に差し掛かっていくわけですが、皆さんはどのように振舞っていかうと思っていますか。今は、長い停滞の後であるだけに、社会が動くことを殊更に実感するのだと思います。もしかしたらこれは、人生のうちでもそうそうあることではないのかもしれませんが。己の意志に基づいた振舞いを意識しつつ過ごしたいものです。

さて、こここのところ、多様性に関する議論が盛んに交わされています。とりわけ、トランスジェンダーを取り巻く議論はかなりの熱を帯びています。「トイレの使用制限」に関する判決から、先日起きてしまった不幸な出来事まで、実に様々な話題について様々な角度からの言説が飛び交っているように感じます。その基底には、やはり、我々が生きるこの社会の不寛容の問題が厳然と存在しているように感じます。コロナ禍において誹謗中傷の問題がクローズアップされる形となりましたが、まさにこれは、この社会の不寛容を象徴的に示すものです。それは問題として社会に認識されながらも、我々は、ポスト・コロナの局面に向かいつつある今となっても、解決の糸口すら見いだせず手こまねいているだけであるような気がして、とても歯がゆく感じます。

先日新聞のオピニオン欄に、『素朴な疑問』が刺さる」と題されて掲載された三者三様の見解は、まさにこの問題

を取り上げたものと考えられます。人生において我々が抱える問題は本来複雑なものであるのに、人は往々にして「普通」でありたいと願い、「普通じゃないこと」の分かりやすい説明を求めて、個人へ「素朴な疑問」をぶつけてしまう。そこでは「誰もが抱える煮え切らなさや複雑さ」は許されない、という分析は、まさに同調圧力によって個人が疎外されていく構造が示されているものと考えます。その「素朴な疑問」は、個人ではなく「権力」に向けようという提案にも、説得力を感じました。また、「素朴な疑問」の中に攻撃目的の悪意に満ちたものが存在するという、トランスジェンダーを自認する方の告発には、どきっとさせられました。その方の、マイノリティーのためのスペースを開設し、そこで「素朴な疑問」がいかに暴力的であるかを具体的に気づかせる対話を実践しているというエネルギーには心から敬服し、実際の対話の大事さに改めて思いが至りました。

このような論調の中で異彩を放っていたのが、絵本作家である五味太郎さんの見解です。私は、教員になりたてのころ、学校で取りざたされる様々な「子どもの問題」に対して、それはすべて「大人の問題」であるとし、さらには「大人が問題」なのであると断じた五味太郎さんの著書に出会って、思考を根本から揺り動かされ、ある種の痛快さを感じたのを覚えています。「素朴な疑問」について五味さんはまず、「子どもには素朴な疑問がいっぱい」と示し、それによって「大人が試されているんだよ」と続けます。例えば「なんで学校へ行かなければいけないの」という「素朴な疑問」に対して大人は、自分でも分かっていないのに知っているように答えなければいけない、大人だって分からないことはいっぱいあるのに、子どもの疑問にうまく答えなければならないと思っている、というのです。さらに、例えば「なんで世界平和がこないのか」という疑問に対して、本当に分からないのであれば、分からないということ共有すれば安心できる、そして議論が建設的な方向に向かう可能性も生まれると述べています。子どものころに持っていた「素朴な疑問」を放棄した大人は、つまりは自己発見のチャンスを逸してしまったのだと言われると、私自身の思考停止を看破されたような気がしてちょっと苦しくなると同時に、不思議と励まされたような気になりました。そして、自己発見ができないまま自分の本質に合わない仕事を続け、疑問を感じなくなった大人が多いから世の中が不安定になる、という分析にも思わず納得させられました。つまりはこの状態が、他者に対する不寛容が支配する世の中、ということにつながるのかもしれない。

分からないことを分からないと言うことは、実はとても難しいことです。日々の学習において「分かる」ことを求められ続けている皆さんにとっては、もしかしたらこれは切実なことかもしれません。しかし、「分からない」と言うことは、自らを惨めな場に追いやることなどではなく、自らのオリジナルの思考により真実を追求することをやめないことなのであり、それは、身の丈に合わない借り物の知識で分かったふりをするよりも、実は心地よいものとなるはずで、五味太郎さんの話題は別の日の別の記事にも取り上げられており、そこで五味さんは、ご自身がある整体師の施術を受けた際に「いい仕事をされていますね」と言われたエピソードを語っています。その整体師は、実は五味さんの仕事を具体的に知っていたわけではなく、その自身のエネルギーを出し切ったような「理想的な疲れ方」をしている五味さんの身体の状態を見て言ったというのです。それをふまえて五味さんは、自分を振り返って、既成の価値や世の中とのバランスに囚われず、自分の身体が納得するまで、つまり自分が空っぽになるまで仕事に取り組むことができているということを実感して、充実と心地よさを感じていると述べています。なにしろ、自分で考えることをやめない、ということが肝要であるということに、改めて思い当たった次第です。

世界に目を転ずれば、戦争はやまず、自然環境の問題、エネルギー問題、食糧問題等々、「分からないもの」がいっぱいです。長い夏休み、このような世界の問題から、もちろん身近な問題まで、「素朴な疑問」に注意を払いながら、「素朴な疑問」に向き合ってみたいものと思います。充実した心地よい日々を送られることを願っています。

以上をもって、本日の式辞といたします。

令和5（2023）年 7月 20日

駒場東邦中学校・高等学校

校長 小家 一彦